

取材 マルティン・フェルプフェン

このプロジェクトがどのようにしてできたのか簡単に説明していただけますか。

基本的には東京で始まりました。2、3年前に長野でのアートフェスティバルに作家として招かれたとき、東京の友人、ギャラリー・サージでキュレーターをしている酒井氏を訪ねる機会があったのですが、そのとき日本とオランダで日本とオランダの作家の展覧会をすることを思いつきました。酒井氏が最初に日本の作家を選出し、オランダの状況に合いそうな作家をその中から選びました。同様に私がオランダの作家を選出し、酒井氏がその中から選びました。

選出の基準は何ですか。

インスタレーションをする作家、それから多様な展示空間になるような固有の特性をもった作品の作家を探しました。また、わかりやすいと言えるような性質をもったもの、つまり、他の人々に見せるのに十分な重要性をもっているものを探しました。これはまたアポロハウスでの過去15年間の作家選出基準における私のポリシーでもあります。

酒井氏にとっては選出においては作家のアンガージュマンが重要な役割を果たします。彼はそれを根の回復と呼んでいるのですが、作家が、今日のわれわれの社会において芸術がそのような機能をもつのか問うということも意味します。

また彼は作家がどのようにテクノロジーを使っているかにも着目します。日本人はわれわれよりはるかにこれらに対して開かれています。それはたぶん日本人が何百年という芸術の歴史に妨害されなかったからでしょう。自律的な現象として日本人は非常に短い芸術の伝統しか知らないということを知っておくのはいいことです。そういった理由で、この短い芸術的歴史にもかかわらず、かれらが現代美術の世界を獲得したというのは驚くべきことなのです。

では、この展覧会において共通のコンセプト、社会的な考えというのはないのですね。

はい。キュレーターとして私は作品がそのベストな状態で展示するという状況を作り出すことが一番重要だと思っています。よって私は作家が彼らの作品に取り入れなければならないような社会的なテーマは選択していません。もちろんある作家が日本社会における女性の位置について何か言いたいことがあるとしたら、私は彼に作品を展示する機会を与えるでしょうけれど、それとこれとは違います。私はテーマにおいて自分自身に厳しい作家を探しているだけです。たぶん後で（選出の後）、社会的なコンセプトがいくつかあることに気づくかもしれませんが。

あなたは日本には最近まで芸術的歴史が存在しなかったという点において、非常に異なった文化的背景を日本人はもっているとおっしゃいました。そのことは、二つのまったく異なった国で作品を呈示することが困難であることを意味しないでしょうか。

いいえ。反対に私はこれは必須条件だと思います。なぜならわれわれは、彼が提案し、私が選択し、私が提案し、彼が選択するというクロスステッチ模様の構成をつくり出しました。そうやってわれわれは自分たちの盲点を訂正することができたのです。

オランダと日本の芸術にはおおきな相違がたぶんあると思いますが、そのように思われますか。

もちろん、違いはあります。オランダとアメリカの作家の場合は、テクノロジーに対する姿勢がしばしば似ていて、滑稽でもあるのですが、彼らはローテクを使う傾向があります。一方、日本の作家はしばしば高価で高度な機会を使用する傾向があります。たとえば、小杉+安藤は相互作用のあるテクノロジーやフロッピーデータ、コンピュータ、ビデオを利用しています。反対にフェリックス・ヘスは、紙と木と言った素材を使っています。

アポロハウスは長いこと日本と関係して来ました。展覧会、鈴木昭男、國安孝昌そしてジャパンフェスティバル。日本の芸術に何か引き付けられるものがあるのでしょうか。

日本の芸術がたとえばアメリカとかポーランドより面白いというわけではありません。重要なことは作家が、自身が重要だと思っていることを他の人々に示したいというポジティブな気持ちをもつということです。そのような芸術は東ヨーロッパでつくられて来ました。なぜなら、そこでは芸術の市場は無く、作家は売るために作品をつくらなかったからです。故にわれわれは中央、東ヨーロッパと頻繁にコンタクトをとってきたのです。それからほかにも頻繁にコンタクトをとってきた理由と、とらなかった理由があります。フランスでは作家は政府に優遇されています。ですからわれわれは彼らの為に展覧会を開く必要はないわけです。私は日本の作家が現在より国際的な芸術の世界でより有望な役割を演じられるようになればよいと思っています。

作家が写真、ビデオ、音楽といった様々なメディアを使用していますが、これは典型的なことだと考えますか。

いまや作家は、すべての多様なメディアを使って作品をつくと時が来たということ、また、それらを使った作品の中で自分の思想を示すことが可能であるということに気づき始めました。多様なメディアの中で、ある思想が表現されることが重要なのです。われわれの展覧会では、多様なメディアを区別しませんでした。

もちろん、違いはあります。オランダとアメリカの作家の場合は、テクノロジーに対する姿勢がしばしば似ていて、滑稽でもあるのですが、彼らはローテクを使う傾向があります。一方、日本の作家はしばしば高価で高度な機会を使用する傾向があります。たとえば、小杉+安藤は相互作用のあるテクノロジーやフロッピーデータ、コンピュータ、ビデオを利用しています。反対にフェリックス・ヘスは、紙と木と言った素材を使っています。

アポロハウスは長いこと日本と関係して来ました。展覧会、鈴木昭男、國安孝昌そしてジャパンフェスティバル。日本の芸術に何か引き付けられるものがあるのでしょうか。

日本の芸術がたとえばアメリカとかポーランドより面白いというわけではありません。重要なことは作家が、自身が重要だと思っていることを他の人々に示したいというポジティブな気持ちをもつということです。そのような芸術は東ヨーロッパでつくられて来ました。なぜなら、そこでは芸術の市場は無く、作家は売るために作品をつくらなかったからです。故にわれわれは中央、東ヨーロッパと頻りにコンタクトをとってきたのです。それからほかにも頻りにコンタクトをとってきた理由と、とらなかった理由があります。フランスでは作家は政府に優遇されています。ですからわれわれは彼らの為に展覧会を開く必要はないわけです。私が引かれていることは、日本の芸術は と、物事に集中する作家の精神です。わたしはその状態にととも関係性を感じています。 の為に日本で作家になるのは難しいのです。私は日本の作家が現在より国際的な芸術の世界でより有望な役割を演じられるようになればよいと思っています。

作家が写真、ビデオ、音楽といった様々なメディアを使用していますが、これは典型的なことだと考えますか。

いまや作家は、すべての多様なメディアを使って作品をつくと時が来たということ、また、それらを使った作品の中で自分の思想を示すことが可能であるということに気づき始めました。多様なメディアの中で、ある思想が表現されることが重要なのです。われわれの展覧会では、多様なメディアを区別しませんでした。

あなたは何度か日本にいらっしゃっていますが、日本のアートの世界はどんな感じですか。たとえば、アーティスト・イニシアティブはあるのでしょうか。

いいえ、オランダと同じではありません。オランダでは、アーティスト・イニシアティブというのはしばしば、安く借りられる建物によって実現しますが、日本ではそういった空間は、ほとんど存在しないし、借りるのにとても費用がかかります。

日本では、アーティスト・イニシアティブを実現するための時間がないのです。もう一つは、作家は展覧会の為にお金を支払わなければならないし、準備の時間がないのです。日本の展覧会は週末には、入れ替えが行われます。

また、日本ではアトリエは、とても費用がかかります。彼らは、自分の家で制作しています。こういった理由で多くの作家が展覧会場で制作できるインスタレーションを行っています。